

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 5 月 17 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18H00632

研究課題名(和文) ビザンティンと中世イタリアの聖堂装飾プログラム比較に基づく相互影響関係の分析

研究課題名(英文) Analysis of Mutual Influence Relationships Based on a Comparison of Byzantine and Medieval Italian Church Decoration Programs

研究代表者

益田 朋幸 (MASUDA, Tomoyuki)

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：70257236

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 9,000,000円

研究成果の概要(和文)：中期・後期ビザンティン美術(9～14世紀)と、ロマネスク・ゴシック期のイタリア美術(10～14世紀)の相互影響関係を、特に聖堂装飾プログラムの側面から考察した。これまでビザンティンからイタリアへの一方的な影響が取り上げられるのみであったが、イタリアからビザンティンへの影響も、バルカン半島において認められた。

聖堂装飾プログラムは、三次元の聖堂空間に、どのような神学的意図をもって図像を配するかを問うものであるが、「キリスト昇天」や旧約聖書図像の配置などに関して、具体的な成果が得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中世イタリア美術史においてこれまで解明されていなかったいくつかの図像の意味が明らかになった。これらはある意味でルネサンス美術の基礎を形成するもので(特に「受難の聖母」図像)、ルネサンス美術(特にジョヴァンニ・ベッリーニやマンテーニャ)へのビザンティン美術の寄与が具体的に指摘される成果を得ることができた。

一方ビザンティン美術史の側では、イタリアからの影響によって解明された図像の細部があり、神学(東方正教とカトリック)と歴史学の分野にも寄与がなされた。

研究成果の概要(英文)：The mutual influence of Middle and Late Byzantine art (9th-14th centuries) and Italian art of the Romanesque and Gothic periods (10th-14th centuries) is discussed, especially in terms of church decorative programs. While one-sided influence from Byzantine to Italian art has been discussed so far, influence from Italian to Byzantine art has also been recognized in the Balkans.

The program of church decoration, which questions what kind of theological intention should be given to the placement of images in a three-dimensional church space, yielded concrete results regarding the placement of the "Ascension of Christ" and Old Testament scenes.

研究分野：美術史

キーワード：ビザンティン美術 ロマネスク美術 キリスト教図像学 カップパドキア 南イタリア 正教神学

## 1. 研究開始当初の背景

代表者が志すのは、ビザンティン美術の広大な世界の全貌を、聖堂装飾プログラム分析という方法論によって把握することである。幸いこれまでの科研によって、バルカン半島の聖堂壁画に関して包括的な調査を行い、バルカン半島と中世ロシア世界（ジョージア、ウクライナ含む）の関係に関して十分な研究を実施することができた。地域的なキーワードで言えば、以上に加えてイタリア、ギリシア島嶼部（含むキプロス）、カッパドキア（トルコ）を視野に入れることによって、ビザンティン世界のほぼ全体像を得ることができる感触を得ている。昨今のビザンティン美術史研究はナショナリズムの傾向が強く、ギリシアの研究者はギリシアの作例を中心に議論し、銘文の残らないイコンやフレスコの作者をギリシア人に比定する。他方でセルビア、マケドニア、ロシア、イタリアの研究者も同様に、文書資料の残らない無署名の作を自国人の作品と考える志向を強くもっている。非ビザンティン世界、即ちアメリカ、イギリス、フランス、ドイツ等では世代が交代し、ビザンティン美術史研究者は著しく減少してしまった。紛争地が多く、多言語を必要とするビザンティン美術研究は、欧米で敬遠される傾向が見られるのである。そのような研究動向の中であって、日本人研究者に有利なのは、自国中心史観から自由である点であろう。広大なビザンティン世界全域を等しく見渡すことができるのは、日本人の強みである。日本には政治的・宗教的なしがらみがなく、調査許可が取得しやすいのも、ビザンティン研究に向いている。

代表者は 30 年以上ビザンティン美術史を研究してきたが、特にこの 15 年は「聖堂装飾プログラム」という方法論をもってビザンティン美術を理解しようとしてきた。聖堂という三次元空間（天井を含む）を装飾するために、いかなる図像を選択し、どのように配列するか。そこには正教典礼上の配慮があるとともに、信徒に教義やキリスト伝・マリア伝の物語を伝える教育的意図がこめられる。図像の選択と配列によって、メタレヴェルの意味の創出が可能である。構図の類似する主題を対面（南北・東西）、上下、左右などの対照的な場所に配することによって、両図像に共通する教義を表象することが強調される。たとえば天井ヴォールトの北側に「エマオの晩餐」（ルカ 24：13-32）、南側に「アブラハムの饗宴」（創世記 18 章）を描く。両図像とも、テーブルに 3 人の人物が着く構図で、形態上の類似が明らかである。加えて「エマオ」はキリストがパンを割き、「饗宴」ではアブラハムがパンを焼いて天使をもてなすところから、両者ともに「聖餐」の教義を担っている。物語素 *narrative element* の共通性によって、異なる物語がつながり、新たな意味が創出されるのである。

## 2. 研究の目的

代表者による過去 7 年間の科研調査によって、ビザンティン美術のバルカン半島における実態、及びロシア（含むジョージア、ウクライナ）への拡散の状況がある程度明らかになった。その結果浮かび上がったのは、イタリアとの相互影響関係の重要性である。西欧のロマネスク（11～12 世紀）・ゴシック（13～14 世紀）美術に対するビザンティン美術の影響は、これまでも漠然と指摘されてきたが、バルカン半島という中間地域を介して、ビザンティンとイタリアの中世

美術が相互に影響し合っていたことを、作例に即して実証する。これによってイタリアの、ひいてはルネサンス美術に対するビザンティン図像学の寄与が明らかになるとともに、ビザンティン美術の多様性の一因が浮彫りになることが期待される。聖堂装飾プログラムの総合的分析という手法によって、客観的な影響関係を明らかにするのが、本科研課題の提起する新しい方法論である。

### 3. 研究の方法

本研究の方法論的に新しい点は、聖堂装飾プログラムを分析の主たる対象とする点である。この方法は西欧の美術史学ではあまり発展しなかった。西欧中世（ロマネスク・ゴシック）では、聖堂天井が壁画装飾の対象となることが少なく、壁画は身廊壁面に連続する物語として配される場合が大半であるからである。一方でビザンティン聖堂は複雑な壁面をもち、各図像は左右・上下・対面、対角線等様々な関係性を結び、新たなメタレベルの意味を創出するのである。このビザンティンの方法論を、イタリアのロマネスク・ゴシックの聖堂にも応用して、両者の相互関係を検証したい。

ビザンティンの聖堂建築は、天井含めて複雑な壁面（ドーム、ヴォールト、アーチ）が多く、プログラムの記述が困難である。聖堂を分割した立面図によっては、図像配置を一望の下に記述することができない。最も有効なのはヴァーティカル・パースペクティブ・プランであるが、この作成のためには時間のかかる測量を要し、専門家による CAD 作図も必要である。しかし近年の撮影機材、及びパソコン・ソフトの開発によって、より簡便な方法が開発された。**ア.** 超広角（14 ミリ）レンズによる高感度（ISO12800 以上）撮影：これによって図像相互の関係（左右・上下・対面）を明示して記述することができる。フラッシュを使用すると影が落ちるので、大型 CCD をもつカメラによって高感度撮影をする。レンズは f2.8 のものを複数使用する。これらの機材は過去の科研で調達したものを利用することができる。**イ.** 三次元計測ソフト Photo Scan による建築の計測：これまで建築の三次元計測のためには、多くの写真と測量が必要であったが、極めて少ない写真によってほぼ同等の計測が行えるソフトが発売されている。このソフトはとりわけシチリアやカッパドキアの岩窟聖堂のような、不規則壁面を有する建築体に対して有効である。**ウ.** 画像復元ソフト D Stretch による剥落壁画の復元：「セッコ（乾いた）」というフレスコ技法で描かれた中世の壁画は、少なからず劣化し、絵具が剥落している。フリーソフト D Stretch は肉眼では判断できない剥落壁画の復元に有効であることが、これまでの調査で実証されている。赤外線撮影を行わずとも、同等の効果が得られるものである。分析対象がイタリアとビザンティンの両地域に互り、銘文はギリシア語とラテン語、場合によっては教会スラヴ語の解読が必須である。撮影・計測にも熟練の人出が必要なので、経験の豊かな研究協力者を組織して対応した。

### 4. 研究成果

当初代表者が構想したのは、ビザンティンとイタリアという 2 項対立の相互影響関係であっ

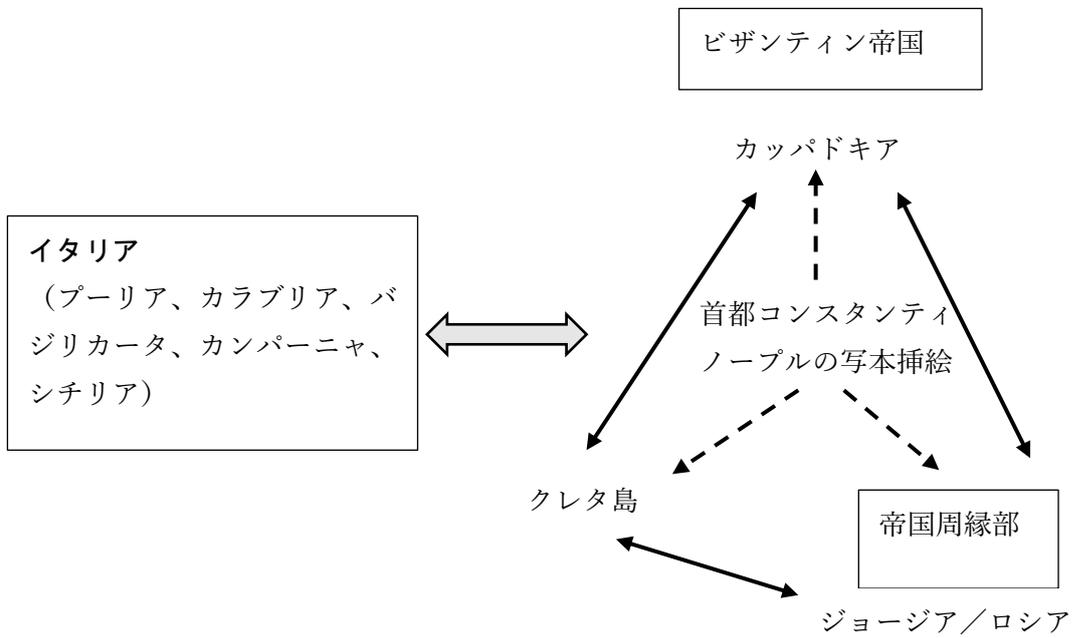
たが、具体的に調査を行う中で、「ビザンティン」という概念が広大に過ぎることが明らかになった。具体的には、クレタ島、カッパドキア、あるいはジョージアといった辺境地域の重要性である。一方キプロス島の作例は、首都コンスタンティノーブルの画家が制作したものが多く、欠落した首都の作例を推定する手掛かりとなる。

・**カッパドキア**：9～11 世紀、及び 13 世紀の作例が多数残っており、ビザンティン帝国本土の作例欠落を大きく補ってくれる。加えて南イタリアの特殊な聖堂装飾プログラムとの共通性を示すものが多いことがわかったのは大きな収穫であった。特にアプシスに「キリスト昇天」を描くプログラムが重要である。シャヒネフェンディの 40 人殉教者聖堂のフレスコが研究上極めて重要であるが、まだ修復作業後のレポートが発表されておらず、撮影をすることがかなわなかった。

・**クレタ島**：12 世紀の壁画も若干残るが、多くは 14～15 世紀の作例で、南イタリアの同時代作例ということになる。共通図像も多いが、年代的に重なり、影響関係の方向性は容易に断定することはできない。12 世紀の稀な作例として、ミリオケファラ村の聖母聖堂は、12 世紀後半の「聖母の嘆き」を残す点で貴重である。12 世紀のビザンティン美術の感情表現の発展を考える上で欠かすことのできないものとなる。

・**ジョージア**：12～14 世紀の聖堂が多く残っている。全体のプログラムは首都やバルカン半島の作例と大きく異なっており、カッパドキアやクレタ島と同次元で論じることは難しいが、南イタリアと共通の図像学的モチーフを少なからず有している。

上記は南イタリアとビザンティン各地とのそれぞれの関係性であるが、今般の調査で浮かび上がってきたのは、ビザンティン各地同士の関係性である。たとえばカッパドキアの 10 世紀の特殊なプログラム（ベリスルマのアラ・キリッセ：南西隅に「燃える炉の中の 3 人の少年」（旧約ダニエル書に由来）と「エジプトの聖マリアの聖体拝領」が組合わされる）が、14 世紀のクレタ島（ラシティ県イエラペトラ市アギオス・ゲオルギオス村聖ゲオルギオス聖堂：南扉口に「燃える炉の中の 3 人の少年」と「エジプトの聖マリアの聖体拝領」の組合わせ）が見出せる、という驚異的な発見があった。偶然によって成立する一致ではあり得ず、共通の手本があったものと想像される。この例からも明らかな通り、ビザンティン⇄イタリアの関係性のみならず、ビザンティン世界内の関係性（カッパドキア⇄クレタ島⇄ジョージアの三角形の構造）を考慮に入れなければ、イタリアとの関係を解明できない。ビザンティン世界における「辺境」の意味を考える際の物理的障害は、図像の発信源であったと想定される首都コンスタンティノーブルにおける作例の欠如である（オスマン帝国による破壊）。この欠落を補完する方法は、比較的作例のよく残っている写本挿絵の図像を考察に加えることであろう。聖堂壁画と写本挿絵とでは、メディアが異なり、装飾プログラムを単純に比較することはできず、もっぱら単体の図像として考えなければならないが、1 冊の写本の挿絵を、一種の装飾プログラムとして分析する方法も開発中である。こうした影響関係を概念図で示すならば、以下のようなになる。



## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計14件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 益田朋幸	4. 巻 9
2. 論文標題 スタロ・ナゴリチャネの聖母伝 ミハイルとエウティキオスの装飾プログラム	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Waseda RILAS Journal	6. 最初と最後の頁 195-207
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 益田朋幸	4. 巻 67
2. 論文標題 Reinterpretation of the Life of the Virgin in the King's Church of Studenica Monastery	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 早稲田大学大学院文学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 459-478
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 益田朋幸	4. 巻 65
2. 論文標題 炎の洗礼 オフリドのパナギア・ベリブレプトス聖堂壁画研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 早稲田大学大学院文学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 461-476
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 益田朋幸	4. 巻 6
2. 論文標題 「速やかに物書くペン」（詩篇44（45））に関する覚書 オフリドのパナギア・ベリブレプトス聖堂壁画研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Waseda RILAS Journal	6. 最初と最後の頁 353 - 363
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 益田朋幸	4. 巻 64
2. 論文標題 裁きの場としての聖堂 アチ（ジョージア）の聖ゲオルギオス聖堂の装飾プログラム	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 早稲田大学大学院文学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 517-532
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 益田朋幸	4. 巻 10
2. 論文標題 聖母マリア伝画像の東西	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 西洋中世研究	6. 最初と最後の頁 7-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 益田朋幸	4. 巻 56
2. 論文標題 パナギア・ペリブレプトス聖堂（オフリド）南西隅の装飾プログラム	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 美術史研究	6. 最初と最後の頁 45-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tomoyuki MASUDA	4. 巻 8
2. 論文標題 Patriarchal Lectionaries of Constantinople: A New Criterion for the Encaenia	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Waseda RILAS Journal	6. 最初と最後の頁 179-194
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 益田朋幸	4. 巻 58
2. 論文標題 ミハイルとエウティキオスの聖域プログラム プロタトン聖堂の知見から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 美術史研究	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tomoyuki MASUDA	4. 巻 66
2. 論文標題 The Lectionary Cod.1 in the Iviron Monastery on Mount Athos and its Encaenia	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 早稲田大学大学院文学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 543-549
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Tomoyuki MASUDA	4. 巻 -
2. 論文標題 Christ and the Twelve Apostles in Cappadocian Churches	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Byzantine Cappadocia	6. 最初と最後の頁 33-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tomoyuki MASUDA	4. 巻 -
2. 論文標題 The Hypapante in the Tokali Old Church and the Byzantine Apse Decoration	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Byzantine Cappadocia	6. 最初と最後の頁 51-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tomoyuki MASUDA	4. 巻 -
2. 論文標題 Byzantine Brocades: A Contribution from Art History	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 S.E. Braddock Clarke, R. Yamanaka Kondo (eds.), Byzantine Silk on the Silk Roads. Journeys between East and West, Past and Present	6. 最初と最後の頁 40-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tomoyuki MASUDA	4. 巻 10
2. 論文標題 The Virgin Orans in Byzantine Apse Decoration	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Waseda RILAS Journal	6. 最初と最後の頁 309-324
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 Tomoyuki MASUDA
2. 発表標題 「総主教座のレクシヨナリー」 (ギリシア語)
3. 学会等名 テサロニキ大学哲学部 / 総主教座附属教父学研究所主催「ビザンティン写本挿絵の世界」 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Tomoyuki MASUDA (ed.)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Alexandros Press (Leiden)	5. 総ページ数 456
3. 書名 Byzantine Cappadocia	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	菅原 裕文  (Hirofumi SUGAWARA)  (40537875)	金沢大学・歴史言語文化学系・准教授    (13301)	
研究分担者	児嶋 由枝  (Yoshie KOJIMA)  (70349017)	早稲田大学・文学学術院・教授    (32689)	
研究分担者	武田 一文  (Kazufumi TAKEDA)  (90801796)	筑波大学・芸術系・助教    (12102)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関